



福 智町は、職員数や公共施設数が肥大化しています。約2.5万人の人口に対し、20万都市並の施設があり、予算規模も大きく膨らんでいます。もはや行財政改革を避けて通ることはできません。全国の市町村数が、3千232から1千820に減った平成の大合併ですが、地方交付税の削減により、再度合併する自治体も増える予想されます。つまり、合併しても財政を真剣に健全化しなければ破たんを招いてしまうという現実を直視しなければなりません。国は今後ますます交付税を削減し続けるものと思われま

す。福智町が乏しい財源のもとで質の高い行政サービスを提供し続けていくためには、仕事の能率について考え、頭や身体を使って努力する必要があります。わたしたちは、この機会を一町民の知恵を出

持続発展する福智を目指す、ピンチをチャンスとして。

第1章 行財政改革の基本的事項

し合い、汗を出し合い、持続して発展する福智町の行財政をつくるきっかけを与えてくれた」と考えれば良いのです。「ピンチ」もチャンスでもあります。そこで、今回の行財政改革は、次の2つを改革の基本的事項としました。

● 改革の基本的事項 ●

I 持続可能な行財政に [財政の健全化]

地方分権の時代における福智町のまちづくりは、町民が自らの責任で自ら決定していく必要があります。その自己責任・自己決定を基本に、厳しい地域経済と財政事情の中で、末永く自治体として存続できる行財政の仕組みを作っていくかなければなりません。この目標達成には、市町村合併の効果を活用しつつも気を許さない、職員、町民、議会の協力が欠かせません。

II 町民本位の仕事改善 [意識と行動の改革]

行財政改革推進委員会の中では、巨額の滞納金問題への対応で、行政に対する厳しい改革を求める意見が集中しました。また、職員に対するアンケートでは、旧3町職員間の意識や仕事のやり方の違いも表れ、意識改革の必要性がにじみ出ていました。町民の意識改革もこれからです。わたしたちが旧3町の意識のままでは、福智町のまちづくりは遅々として進むものではありません。行政は町民の立場で柔軟に考えて行動し、民間でいう顧客志向（お客様本位）の考え方に立たなければなりません。

● 行政の風土改革による職員の意識と行動改革 [特別重点項目]

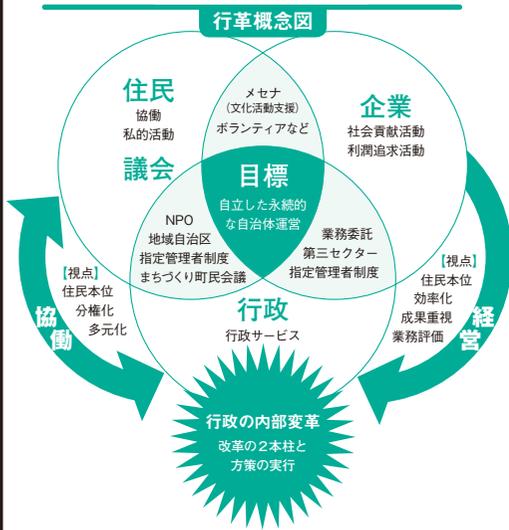
● 職場の和を基調としたグループ長制の導入

● グループごとのテーマ設定やCI手法による改革運動の実施

● 職員の自発的な勉強会や自己研修の奨励

● 町民との協働活動の場への職員参加奨励

● 来庁者への声掛け運動



視点の説明

- 住民本位**▶ 住民の立場で柔軟に考える。
- 効率化**▶ 民営化や協働化を進めコスト意識を持つ。
- 成果重視**▶ 予算消化ではなく、成果を評価する。
- 業務評価**▶ 評価と振り返りでの仕事の仕方を改善。
- 分権化**▶ 現場へ権限を移譲する。
- 多元化**▶ 役場以外も公共サービスの担い手に想定。

はじめに

健康長寿世界一の皆川ヨ子さんが生まれ育って暮らしている福智町にほこりを

福智町は平成18年3月6日、下田川の赤池町、金田町、方城町の3町が近隣の市町村に先駆けて合併し、誕生しました。わたしたち行財政改革推進委員会は11月に中間報告をまとめ、町長に答申するとともに、職員へのアンケート、町民などへのブックコメントを実施してきました。ここに本答申をまとめ、浦田弘二町長をはじめとする行政職員、町民、議会の皆様方に答申いたします。

福智町について特徴的なことは、旧3町いずれも準用再建団体（会社で言えば倒産）という不名誉な経験を共有していることです。金田町は7年間、方城町、赤池町は10年間（平成12年まで）、長いトンネルを抜けて再出発しました。その後、パブル崩壊後の景気対策として国が展開した「地方債（借金）に依存したハコモノづくり」の政策に3町とも深く足を踏み込み、過去の教訓を生かさず、立派な建物づくりを先行させて、多額の借金自治体になってしまいました。そして財政基盤が弱かったために「合併こそ地域再建の特効薬である」として、合併特例債など期限付き財政支援をあてにした3町合併への道を選ばざるを得ませんでした。

町民には、足腰の強い自立した町、質の高い職員集団の組織、少子高齢化に向けた保健・医療・福祉サービスなどが提供できる町になるとして、多くの期待を抱かせてきました。しかし、行財政が健全な福智町などは、財政指数を見る限り言えません。この現状に加え、国の「三位一体の改革」による国庫補助金や地方交付税の厳しい削減などもあり、町財政はさらなる危機的状況にあります。

しかし、我々は、この時期を町政の役割や住民・議会のあり方や考え方も問い直し、住民・職員相互の信頼や連帯を深める絶好の機会としてとらえたいと思います。わたしたちは新たな自治体像をつくりだす立場です。ムダなお金を使わずに「住民が安心して豊かに暮らせる町づくり」「子どもから大人、高齢者が誇りと自信を持てる町づくり」を実現させなければなりません。

今年1月30日に世界一の健康長寿となられた皆川ヨ子さん（114歳）は、わたしたちの町で生まれ育ち、現在に至っています。この町には、このような良い風土があるのです。そうした風土をさらによくするためには、第1に、行政職員が「行政＝世話役の原点に回帰する」ことです。今までの固定観念にとらわれず、職員一人ひとりが地方行政の担い手となり、町のリーダーとして地域を支えていくことが求められます。職員のような自助努力なしには、町民の意識改革も新しいまちづくりの理念・目標の実現も望めません。

第2に、地方分権にふさわしい町民のためのまちづくりは、職員のみならず、町民や議会との協働（パートナーシップ）なしには達成することができないということです。我々はこのような観点から行財政改革の大綱を示し、改革の着実な推進のため、みなさんのご理解とご協力を願うものです。

いま地方は冬の時代を迎えています。北海道夕張市は、旧赤池町に続いて準用財政再建団体の指定へと踏み切りました。つまり自治体の倒産です。増え続ける借金、減り続ける人口、市民一人あたりの肩にのしかかる借金の重みは加速度を増しています。わたしたち行財政改革推進委員会は、この半年間、毎週討議の中で厳しさを肌身に感じてきました。いま福智町は、合併によってこの財政危機を乗り越えるチャンスができたと言えます。しかし、このチャンスを生かさなければ財政破たんは目に見えています。この時期を生かしてこそ未来が開けるものと確信しています。「北の夕張、南の福智」とならないよう、今こそ町長をリーダーに、職員・町民・議会が一丸となって行財政改革に挑まなければなりません。わたしたちの福智町に誇りをもって、さらに良いまちにしていこうではありませんか。

福智町行財政改革推進委員会